

今年も論説文には力作がそろいました。その中で優秀賞に輝いたのが「ヘイトスピーチを考える」です。今年、新たな社会問題として話題になったヘイトスピーチを取り上げ、背景に隠れた人類の差別や言葉が持つ暴力といった普遍的なテーマに焦点を当てました。

韓国人街があることで知られる東京・新大久保では今年、安倍政権による保守的な考えが国内で強まったこともあり、在日韓国人に対して激しい言葉をののしりながら練り歩く行動が続きました。その根底にあるのは異人種に対する差別です。明らかに「表現の自由」の域を逸脱した行動でした。その一方で対立するグループも登場しました。新聞でそのことを知った筆者は一瞬、そこに平和な行動を期待しますが、結局はののしり返すという、同じような行動形態でした。「相手が卑怯な道具を使うからと言って自分が同じ道具を使うのは正しいのだろうか、という苦々しい思いが混ざり合っていた」といいます。

「ののしりにはののしりを」からは何も生まれません。そこで筆者は考えます。この憎しみのスパイラルを断ち切るには、どうすればいいのかと。そこで考え付いたのが「その恐ろしさをできるだけ多くの人に伝える」ということでした。その思いからこの論説文を書いたといえます。「言葉を武器にすることがもたらす残酷さを発信していきたい」と結論付けます。言葉の恐ろしさを伝えるのもまた、筆者本人の偽らざる言葉、なのです。

題材に今年あった時事的なテーマを取り上げ、新聞の記事などをもとに複数の意見を紹介し、最後は自分の意見をまとめて提言するという、論文形式をきちんととどった作品で、読者にもそのメッセージはよく伝わったと思います。惜しむらくは、テレビや新聞だけに情報を頼ってしまった点。筆者の通う学校は新大久保のすぐ近く。もし、この作品に現場で自分が見聞きしたという自分の体験談が少しでも盛り込まれていたら、さらに説得力のある論文になったことでしょう。

奨励賞の「国のトップと国民の関係について」もユニークな作品でした。憲法違反の選挙制度というニュースをもとに、「どうすれば国民の意見をもっと政治に直接反映させることができるか」を試みました。スウェーデンの首相の例を題材に、独自の「場所変動型対話企画」を考えだしました。アイデアは「国のトップとエレベーターの中で話し合う」という斬新なもの。限られた30秒ほどの時間の中で、どこまで自分の意見をはっきりと伝えられるのか。常に30秒以内で意見を言えるように、備えておきたいものです。

特別賞の「芥川龍之介『羅生門』の老婆から」は、名作『羅生門』を読んで、そこに隠された原作者のメッセージを自分流に解釈したものです。生き抜くために死人の髪を抜く老婆の中に「自分の生を肯定し、愛している姿」を見つけます。また、隠れた登場人物である近代人の目をそこにだぶらせ、「未来にこのようにありたいという自分を思い描いて愛している」とします。理想的な「未来」とかけ離れた現在の「今」。そこから「私自身の『未来』づくりを始めたい」とまとめます。やや抽象的な表現が多かったのが今後の課題ですが、とは言いながら、いつの間にか読者を持論へと引き込む不思議な魅力を持った文章でした。本来の論説文とは言えませんが、今回、特別賞としました。